ストライカーとクイーン・ルール王国

トゥシャール・テレ
タイムス・オブ・インディア　2019 年 1 月 6 日 午前 4 時 2 分 投稿

ヴァドーダラ：夕陽が街の地平線に沈むと、若者だけでなく高齢者のグールプまでもが、タルサリ地区にあるアパートの玄関前に毎晩のように集まってくる。彼らは椅子を引っ張り出し、電気を灯し、キャロムボードの周りに座る。数分も経たないうちに、巧みなショットにギャラリーが称賛して、辺りは歓声と拍手で活気づく。
何十年もの間、ヴァドーダラは、グジャラート州におけるクリケットの中心地と言われてきたが、まったく別のスポーツであるキャロムに熱狂していることはあまり知られていない。

そうなのだ！ 何百人ものバローダ市民がキャロムに熱中しており、市内には約 10 軒のキャロムクラブがある。大学生から社会人、ビジネスマンから八百屋さんまで、キャロム愛好家は毎日さまざまな場所にグループで集まると、何時間でもゲームに興じている。

「キャロムは家庭の娯楽として遊ばれてきましたが、スポーツ競技としてプレイされるようになったのは 1970 年代のことで、1970 年代に正式なキャロム協会が結成され、地元で大会を開催するようになりました。その大会に出場するため、市内から何百人ものエントリーがあることに驚かれることでしょう」とバローダ地区キャロム協会（BDCA）の共同幹事のジャヤン・ランジは語る。

元キャロム代表選手のクンジャ・ファンス（68）は、「この熱狂の背景には、キャロム文化があります。毎日午後 3 時過ぎにカンデラオ・マーケットを訪れると、野菜の卸売業者が人里離れた一角でキャロムに興じているのを見かけることでしょう。皆さん、夜遅くまでゲームに熱中しています」と語る。

「タルサリ地区では、空き地に電球を灯すための電源設備がないので、高齢者や若者の中には視界を良くするためにキャロムボードの上に懐中電灯を逆さまに吊るす人もいます。キャロム愛好家に必要なのは、ある程度のスペースとキャロムボードだけなんですけどね」とファンスは付け加えた。
キャロムプレイヤーは、毎年市内でバローダ地区キャロム協会（BDCA）が主催する 5 つの地方大会で、サブジュニア、ジュニア、メンズ、レディース、ユース、ベテランを含めたあらゆるカテゴリーで、自分の腕を試すことができる。

バローダ地区キャロム協会（BDCA）とグジャラート州キャロム協会（GSCA）のヴラジェッシュ・ジンダル会長は、「このゲームは、市内の政府部門、銀行、保険、国営企業の職員たちもプレイしています。私たちは常にこのゲームの普及に努めて参りましたが、さらに多くの人を巻き込んで、ゲームの競技性を高める余地が、まだまだたくさんあります」と語る。

「単純なゲームに見えるかもしれないけど、キャロムは神経を使うゲームで、物理学と幾何学がすべて。キャロメンを打つときにストライカーにどれだけの圧力をかけるか、ポケットに入れるため、どの面を打てば良いのか、それがとても重要で、練習すればするほど、技術は磨かます」とファンスは語る。

ベテランクラスで全国大会に出場しているサリル・デシュパンデは、「バローダの人たちはこのゲームが大好きで、多くのクラブがあり、若者から高齢者まで、何時間でもキャロムで遊んでいます。私は自宅の駐車場の一部にキャロムを設置しているので、誰とでもプレイできます」50 歳のデシュパンデは、ベテランのサティシュ・マハントとラジュ・マハントが経営するトゥルシ・クラブのメンバーだ。

大会の中心地
ヴァドーダラでは、1995 年のサブジュニア全国大会、1998 から 1999 年の第 27 回サブジュニア全国大会、2005 年の第 34 回ジュニア全国大会、2009 年のフェデレーションカップとサブジュニア全国大会など、4 つの全国大会を開催している。州内の他の都市も同様で「キャロムプレイヤーはいますが、ヴァドーダラのレベルに匹敵するところはありません。我々は最大数のキャロム選手を輩出しているのです」とバローダ地区キャロム協会（BDCA）関係者は語る。

ヴァドーダラのコティ近くのクラブでゲームを楽しむキャロムプレイヤー

後援者を求む

キャロムプレイヤーは政府からも民間からもほとんど資金援助を受けていないため、依然として資金が大きな問題となっている。バローダ地区キャロム協会（BDCA）関係者によると、国営企業が資金を提供することもあれば、プレイヤーが自ら寄付をすることもあると言う。バローダ地区キャロム協会（BDCA）関係者は、協会が適切なプレゼンテーションを行えば、州政府の援助を得ることができると述べた。

ヴァドダラ出身の国際キャロム審判員

これまでヴァドーダラは、K・D・ムドゥルカー、クンジャ・ファンス、スニル・グプテ、ラジブ・マハント、サティシュ・マハントの５人の国際キャロム審判員を輩出してきた。

クンジャ・ファンス（元キャロム国代表選手）

スポーツ選手一家に生まれたクンジャ・ファンスは、常にインドのスポーツと陸上競技を愛していた。彼女はコーコーの MS 大学代表であり、国体レベルでも走った。バローダ銀行の役員だったファンスは、1970 年代に室内スポーツに転向し、キャロムと卓球を始めた。1979 年にナグプールで開催されたキャロムで初めてグジャラート州代表となり、1990 年まで州代表を務めた。1991 年にキャロム審判員の資格を取得すると、2004 年には国際キャロム審判員（グレード A）となった。その後、彼女はバローダ地区キャロム協会やグジャラート州キャロム協会を指導して、主審としてトーナメントを開催するほか、さまざまな役職を歴任した。「多くのトーナメントを開催して、若者たちをキャロムのゲームに引き込むことができたので、長い道のりではありましたが、充実したものでした。今は他の有能な人たちに責任を譲りました」とファンスは語る。

イムラン・シェイク

イムラン・シェイク（ナショナル・キャロム・プレイヤー）

子供の頃、ヤクトゥプラにある彼の家で最初に耳にしたのは、木製ボードでキャロメンを打つストライカーの音だった。彼はキャロムを見て育ち、キャロムをプレイした。

「私の父はキャロムの地区チャンピオンだったので、私の最初で最高のコーチでした。父からゲームセンスを学んだんです」と 38 歳のイムランは回想する。

「2000 年から競技としてプレイするようになり、その年に初めて全国大会に出場しました。2001 年以来、州のキャロム選手権で優勝しました」と彼は付け加えた。

イムランは、全国キャロム選手権で 6 位になったことがあり、ウエストゾーンの決勝に 2 度進出したことがある。

「キャロムはヴァドーダラでよくプレイされています。政府はより多くのチャンピオンを輩出するために、このゲームをもっとサポートする必要があります」とイムランは語る。

https://timesofindia.indiatimes.com/city/ahmedabad/striker-queen-rule-the-royal-state/articleshow/67400785.cms

翻訳：石川　久